

ランドセルのバトンタッチに込めた私の想い

住井 田香

見慣れたはずの自分の部屋なのにふと訪れる違和感。理由は簡単だ。ランドセルがないからだ。

卒業前、家族と選んだ茶色とピンクの珍しいタイプは、偶然にも親友とお揃いだった。毎日ランドセルを背負って学校に行っていた姉に追いついたようで嬉しかったことを今でも覚えている。六年間を共に過ごしてきたランドセルは、かけがえのない「相棒」だった。卒業すればランドセルは使わなくなる。わか

No.1

No.1

ってはいしたが、急に寂しさがこみ上げてきた。「アフガニスタンの子供達に送らない？」母からの提案に最初は少し戸惑いを覚えたのだが、愛読しているノーベル平和賞を受けたマララさんの本のことを、はっと思い出した。マララさんの名の由来となった勇気ある女性兵士がアフガニスタンに住んでいた。マララさんが女子も勉強するということの大切さを広めるために立ち上がったのは、パキスタンやアフガニスタンでは貧しいからだけではな

く、宗教や慣習の為、勉強の機会を与えられ
ない子供がたくさんいるからだ。

「うん、送ってあげよう。」

もう迷いはなかった。中学生になった私に
はスクールバッグがある。女子でも当たり前
に学ぶことができる私は、とても恵まれてい
るのだ。

No.2

こうしてランドセルが我が家から旅立って
五か月が過ぎた。だが今も、いつも置いてい
た場所に、少し傷付いた愛着あるランドセル

No.2

があるかのような錯覚を起こすことがある。
そんな時想像するのだ。あのランドセル、ど
んな子が使ってくれるのだろう。マララさん
のような女の子が使ってくれていたら嬉しい。

中学生の私でも支援はできるといふ少しの
誇らしさと、その子に負けないように頑張り
うという気持ちでいっばいになる。私にとっ
てあのランドセルは、単なる過去の思い出で
はない。見知らぬ誰かの「相棒」としてバト
ンタッチした今も大切な宝物なのだ。